

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

障害者の医療機関利用にあたっての課題と好事例の収集に関する調査研究

研究分担者	飛松 好子	国立障害者リハビリテーションセンター	総長
研究協力者	富安 幸志	同 病院	障害者健康増進・運動医科学支援センター長
	樋口 幸治	同 病院	健康増進・運動医科学支援センター・運動療法士長
	清野 絵	同 研究所	室長
	今橋 久美子	同 研究所	室長

研究要旨

障害のある人が、がんなど、障害の原疾患以外の疾病による医療機関の受診にあたり、適切な対応を受けられるよう、受診時の困難や好ましい対応の事例を収集することを目的として、当事者 22 名を対象にインタビューを行った。その結果、医療機関における対応や配慮以前に、受診のための予約準備や移動の問題が顕著であった。それらの困難さが、受診を控える、検診を受けないなどの受療行動に影響を与えることが示唆された。

A. 研究目的

障害のある人の医療へのアクセスが阻害されているという指摘は先進国においてもしばしば指摘されている。一方、日本においては 2016 年に障害者差別解消法が施行されてからも、医療機関では十分な対応マニュアル等が準備されているとはいえない状況が続いており、医療現場での適切な対応を促すための医療者向けの情報が必要な段階にある。

障害のある人が、がんなど、障害の原疾患以外の疾病による医療機関の受診にあたり、適切な対応を受けられるよう、障害のある人が受診する時の種々の事例を収集する。

B. 研究方法

国立障害者リハビリテーションセンター病院の外来患者および自立支援局の利用者を対象とした。

研究者は、研究についての意図と内容について説明し、同意の得られた協力者に個人インタビューまたはグループインタビューを行った。インタビュー時間は 30 分から 1 時間程度とし、下記の 3 つの質問を中心とした。

1. これまで医療機関を受診した中で、困った経験はありますか。それはどのようなことでしたか。
2. 医療機関の受診において、スタッフから好ましい対応を受けた経験はありますか。それはどのようなことでしたか。
3. 適切に医療を受けるという点から見て、課題だと思っていることはありますか。

なお、本研究は、国立障害者リハビリテーションセンターおよび国立がん研究センターの倫理審査委員会の承認を得て実施した。

C. 研究結果

対象者 22 名（うち 3 名は付き添い家族が同席）にインタビューを行った。

障害種別は、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害、音声・言語機能障害（失語症）、高次脳機能障害、知的障害、それらの重複であった。各質問への回答は口述のとおりに記載した。

1. これまで医療機関を受診した中で、困った経験はありますか。それはどのようなことでしたか。

【肢体不自由】

- ・ アクセスに苦勞する。車いすで自走して片道 1 時間近くかかる。特に夏はきつい。公共交通機関がなく、タクシー(料金)が高額。
- ・ 最低限必要な受診以外は控えがち。入所中は定期健診を受けるがそれ以外は受けない。
- ・ 入院中に、病棟の職員が忙しそうなきに何か頼むと、溜息をついたり、舌打ちをしたりするので、我慢せざるを得ない。

【視覚障害】

- ・ 検診は、自宅での検体(尿や便)の採取が難しい。
- ・ 初めていく場所は、病院に限らず同行援護サービスを申し込むが、支援者と日程があわないと行かれない(あきらめる)こともある。

【失語症】

- ・ 受診予約の電話に苦勞する。特に、キャンセルや日時変更について言葉が出なくて大変。

【高次脳機能障害】

- ・ 受診はひとりで来られるが、薬や治療の変更は、(本人が)実家の父親に聞いて、父親が医師と電話で相談して判断している。

【知的障害】

- ・ (親による回答) 入所施設から外来受診する場合、施設の提携先の病院以外だと、親が付き添う必要がある。親は高齢のため運転ができないので、タクシーを貸し切りにして、自宅から施設に迎えに行き、病院に同行する。院外薬局で処方薬を受け取り、施設に戻る。自宅が遠いので、1日かかる。

2. 医療機関の受診において、スタッフから好ましい対応を受けた経験はありますか。それはどのようなことでしたか。

【視覚障害】

- ・ 職員が自然に肩を貸してくれたり、丁寧に案内してくれたりする。治療についてもゆ

っくり説明してくれる。

- ・ 新型コロナウイルスのワクチン接種を通い慣れた医療機関で受けられた。

【聴覚障害】

- ・ 医師はホワイトボードで説明してくれる。わからないことはスマホで調べている。医師との連絡はFAXを使っている。
- ・ スマホで予約できる病院はありがたい。

【知的障害】

- ・ 施設の提携先の病院に、紹介状を書いて調整してくれた。受診先が一か所になり、施設の職員が付き添うことになった。

3. 適切に医療を受けるという点から見て、課題だと思っていることはありますか。

【肢体不自由・知的障害】

- ・ (親による回答) 親亡き後を考えて、グループホームで生活することになった。病院の付き添いは頼めるとしても、治療の選択や薬の変更を決めるのは難しいかもしれない。体調や日常の様子を適切に伝えられるかどうか判断しかねる。

【聴覚障害】

- ・ 医療だけではなく、スマホに頼っているので、非常時に停電で充電ができなくなると困る。充電できる場所があると安心。

D. 考察

当事者対象調査では、医療機関における対応や配慮以前に、アクセスの問題が顕著であった。アクセスの困難さが、受診を控える、検診を受けないなどの受療行動に影響を与えることが示唆された。また治療方法の選択や薬の変更など重要な決定について、家族等が同行はしないものの、電話等で主治医と話したり、判断したりしていることがわかった。

E. 結論

昨年度実施した、支援者を対象とした調査では、受診時の困難は接遇に関するものと設備環境に関するものがあった。今回の当事者対象調査では、家族や支援者の付き添いなく、一人で通院している人がほとんどであり、接遇や設備環境といった医療機関内のことよりも医療機関までのアクセスに関する問題の方が顕著であった。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

今橋久美子, 清野絵, 緒方徹, 樋口幸治, 飛松好

子, 八巻知香子. 専門職からみた障害者の受診時の困難に関する研究. 日本リハビリテーション連携科学学会. 2021. 3. 5.

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし